

## 小説『キルリーの巣窟』読后感想と批評

※すべて関連部分のみの抜粋です。

◇\*M.K (小田原市・画家・詩人)

「よく出来ています。が、読後何かスパツとした切れが今一つと思います。筋立ても良く、人物も配されて素敵ですが。人間間のアツレキもよく書けていますが、もう少し専門的要素を省いても良いのではと思います。一つはご自身の知識と職場、労働環境のカラミは理解できますが。

こう言いながら小生の人生と重なる面がトコロドコロに顔を出し重ねるシーンに思わず落涙しました。それはさておき、もう少し登場人物を絞るかされて、葛藤の様を書かれても、濃い味がして賞味です。が、結末をどうされるかに、読んでいてこうなると平凡、かといって余りの結末もどうかと勝手に頁をめくりながら想いを膨らませてしまいました。

人間、他人への信頼度の多寡により綾織りは変わってきますのも当然、会話体のところも練られていて、文の流れもとても良いと思います。カラミ合いのシーンや女性心理も良く書けていると思います。失礼ながら今まで感じていた、もう少し長く書かれた方がの懸念は、今作品はありませんのは、スクワれました」

◇\*K.I (秦野市・公務員・文芸同人)

「最後に全部ひっくり返ってしまったものですから再度読まずにはいられませんでした。これまで積み重ねてきたものが一気に瓦解していくあのラストにはびっくりしました。池井戸潤的な企業再生のドラマと思っていた私が甘かった。

読み終わった後で、この小説は「悲劇」なんだなって思いました。悲惨なことが描かれているという意味の一般名詞のとしての「悲劇」ではなくギリシャ悲劇とかシェークスピア悲劇とかいう文学的意味での「悲劇」。昔何かで読んだんですが、悲劇とは神が与えた運命に対する人間の抵抗とその挫折を描いた文学作品という風に定義していたと思った。そういう意味での悲劇です。

考えてみれば、タイトルは「キルリーからの脱出」ではなく『キルリーの巣窟』。これは前に進んでいけない人間たちのもがきを描いた作品なんだと、最初からタイトルが示していたんですね。

正直に言えば、一読目には私は小糸ちゃんが、ちょっと苦手でした。あんまり完璧すぎて。ラスト近くになって、頭取の秘書の人が、小糸ちゃんのこと、彼女は救世主病なのだと指摘しますよね。あの瞬間に私の中でコペルニクス的変換が起こりました。あの誠実、あの献身、それ自体が彼女の抱えた闇だったのかと。そんなわけで読み返さずにはいられなかったのですが、ラストを知ったうえで再読してみると、とても哀しい女性だと感じるようになりました。

いや、小糸ちゃんだけでなく、剛志のがんばりも、ホテルの中に起こった小さな奇跡も、そのすべてが切なく感じました。そうそう再読して、私は飯塚さんという人物の重要性に初めて気付いた気がします。たしかに彼女も辛い過去を背負ってはいるんですが、キルリーの巣窟にあって、唯一彼女だけが前向きに飛んでいる気がしました。だからこそ彼女の視点は、とても常識的で、それは私たちの感覚にとっても近い。それだけで、彼女がそこにいて、何だかホッとするような感じを受けました。ともかく、とても読み応えのある小説でした」

◇\*M.Y (八王子市・職員・詩誌同人)

「この小説で特に見事で面白いと思ったのは、登場人物、たちでした。小糸さんは当然のことですが、他の登場人物が、たとえそれがどんな端役であっても、すべての人物が、実にきちんと描かれていて、その顔、服装、声まで分かるような気がしました。(ほんとうですよ)これはすごい。作者がきつとそのような意図をもって描かれたのですね。思えばひとりひとりの普通の、そこらに生きている人を…いい人から、悪い人、自分のことしか考えない人、愚かな人…を、こんなにしっかりと描かれている小説はなかったのではありますまいか。

さらに後半部の次々と変化していく、私には追従できなかったスジの展開。確かに、小糸さんの活躍で奉潤が立て直されていくと言う筋でも良いと思いますが、それは一般読者の考えですね。作者は見事にそれを一段、そして二段目、と裏切って下さいました。それはそうですね…題名、さらに作者のテーマからしても、ハッピーエンドになるわけがないと思ったわけです。それでも想像ま

た期待(笑)を瞬く間に裏切って描かれたのは、さすがこの作者と嫉妬(笑)した次第です。

しかし作者の理想の女性、スーパーウーマンの小糸さんには驚きました。あのような結末にしようとは。作者がどういう理想で(笑)、こういう女性を生み出したのか。それも見事に、読者が願わない(笑)方向に、あるいは予期していた方向と真逆に、剛志氏の人生を含めてもてあそんでいくか…小糸さんは、こうして(矢代さんとの別れ方にはちょっと割り切れないものがありました)ひとりの強い女性、誰にも寄りかからずに今後を生きていくんだというメッセージは届きましたが、結末として、これでいいのか、こうして全てがゼロに戻ってまた始まるのいいのか、拙い読者としては、カッコいい終わり方でいいのかと、悩みに悩んでしまった、ちょっと置いて行かれた思いが残りました。

題名について触れるのを忘れていました。キルリーの巣窟とはまさに、私たちのふだんの世界でした。それにしても、あとがきにあるように、随分と考えに考え、構想を練り、そして結構一気呵成に描かれたのです。他の読者の反応はいかがでしたか？ 私は他の読者がどういう反応をなされたか知りたいですね。」

◇\*T. I (横浜市・元教諭)

「新作ありがとうございます。おもしろかった。人間関係がすっきりして、読後感もすっきり」(賀状にて)

◇\*K. S (横浜市・医師)

「送っていただいた小説を読み終わりました。テンポが良いので一気に読み終わりました。読みながら、人物や、場面、その展開など、こんなにもたくさん[引き出し]を良く思いつくなど、感心ばかりでした」

◇\*Y. Y (横浜市・会社員)

「通勤途中しか時間ないのに一気に読んだ感じです。テレビドラマみたいにどんどん引き込まれていきました。作者の人間観察鋭くて、おちおちお話できない?(笑)とおもいました。たのしい時間でした。また違うホンができれば教えてください」

◇\*H. K (伊東市・会社員・文芸同人)

「今回キルリーの巣窟を読みながらツッコミメールをやり取りする中で、何よりのご褒美をいただきました。それはいただいた返信 [最後の長編として深刻な感じで書き始めたのですが、キルリーの巣窟を最後から二番目の長編にしたいと思うようになりました] この一文に尽きます。ファンの一人として嬉しいことこの上なしです。岩漿を退かれた後、キルリーの書き始めの頃に、最後の長編と言われて、体調不良で思うに任せない事がありになるんだらうなあと、胸塞がれる思いでした。でも本作を読み進めるうちに、こんなに熱のこもったリアルなシーンを枯れた心で書けるわけがないという思いが内から擡げてきて、一人で熱くなってドキドキしていました。その気持ちを作者の言葉で証明出来て、本当によかった」

「矢定久江の手紙は、菜穂子の物語を一度フェードアウトして、262頁からに載せてほしかったな」

◇\*T. S (武蔵野市・会社役員)

「小生は、あの小説に接して喜んでおり、気を悪くなどしていません。何れゆつくりとメモを送ろうと思いますが、建設的な旅館論をやりたい気持ちです」

◇\*Y. K (伊東市・会社員・元同人誌幹事)

「非の打ちどころのない主人公が元ボスから特命を受け、経営不振のホテルに潜入するが、救世主病の彼女がいつしかホテルの立て直しに奔走する。

意識の低い従業員たちの意識改革を図りながら次々に起こる問題を、持ち前の知恵と度胸と根性(&美貌)で解決していく。最後ホテルは人手に渡ることなく、めでたし、めでたし…そんなストーリーが始まりから予測されました。

ほんの少しの『やれやれ』感(失礼)を持ちながらも読み進められたのは、崩れることのない一定のリズムで書き上げられた作者の優れた文章力と話の運びがあったから。それに小説を書く前によく下調べされたようで、一つ一つの出来事や会話にリアルさがあり、この小説に重みがあったからです。

しかしながらこの小説の面白みは、予想する流れに沿うことなく、傾いたホテルの根深い病巣を自分一人の力ではどうにもできないと主人公が見切りをつけ、準主役と思われた(結局の小説の登場人物の一人でしかなかった)剛志と結ばれることなくホテルを去り、ホテルは倒産するという結末にあります。スーパーウーマンはぐっと現実味を帯びた一人の女性となりました。

倒産の原因の糸を辿れば人を信じない矢定にあり、最後にやっと信頼を胸に死を迎えられると、勝手な自己満足だけで死んでいく…後ろ向きに飛ぶ孤独の老人こそがまさに『キルリーの巣窟』の主、この物語の本当の主人公なのだ最後の一行まで読んで読者は気づくのです。やられました。

全体として大人の男の人が書いた小説、一行一行に書くことへの誠実さを感じました。

また「社長になったらバカな剛志に戻っちゃった」は何気ない会話のようでいて、とてもこの小説に必要な効果的なセリフでした。小説の最後を手紙で終わらせる方法は非常に好みです」